

実践と研究を編む

(2) 教育臨床社会学が対象とするフィールド

前回の「(1)教育臨床社会学という専門性」で紹介したように、教育臨床社会学の基本的な問題意識は「社会学としての性格を保ちつつ、さまざまな問題を抱えた学校教育をどう改善すべきか、教師の実践的指導力を向上させるにはどうしたらいいかという、現場が直面する喫緊の課題に対して、教育社会学にいかなる可能性があるのか(酒井 2014)」にあります。

こうした問題意識のもと、教育臨床社会学では、対象とすべきフィールド(場所や空間)について、以下のように「ミクロ」「メゾ」「マクロ」の3つのレベルで分析的に整理しています(志水 2002、酒井 2014 ほか参照)。

・ミクロレベル:教室や学校全体など

さまざまな教育課題が実際に生じる中で、教師と子どもたちが教育活動に携わるフィールド。授業が行われる教室は最も中核的なフィールドですが、学校行事など、学校が組織的に子どもたちに指導を行う場合には、学校全体も該当します。

・メゾレベル:教育実践を経営・管理する学校、学校を統括する地方教育行政など

ミクロレベルでの実践を経営管理する役割としての学校や、それを統括する市町村教育委員会・都道府県教育委員会といった地方教育行政などが該当します。

・マクロレベル:国家教育行政、支配的教育言説など

国家教育行政としての文部科学省による行政施策(基本的な教育方針の策定、法律や規則の制定、カリキュラムの規定など)や、それに正当性を与える支配的な(社会の中で広く共有されている)教育言説などが該当します。

いずれも実践の在り方を左右するものであり、直接的に実践の場であるミクロレベルの研究からメゾレベルやマクロレベルの研究へと往来しながら、そこに生起するさまざまな課題について、現場とコミュニケーションを図ろうとする姿勢が研究者には問われます。

いずれのレベルも、キャリア教育に関する研究のフィールドとなるはずですが、本学会での研究発表や学会誌への投稿論文を眺めてみると、ミクロレベルの研究が蓄積されている一方で、メゾレベルやマクロレベルの研究は不足しているように感じます。

【引用・参考文献】

・酒井朗(2014)『教育臨床社会学の可能性』勁草書房。

・志水宏吉(2002)「研究vs実践－学校の臨床社会学に向けて」東京大学大学院教育学研究科紀要 41, pp365-378.

(日本大学文理学部教育学科 望月由起)